

村へ近づくと、犬のシルベルが一声吠えた。村の様子がおかしいことに気づいたのだ。

無論、俺だって村がいつもと違う感じなのは気づいていた。村へ来るのは一週間ぶりだ。

村は騒然としていた。近くにいた住人に話を聞く。

村の近くを通る川に水死体が流れ着いた、という話だった。

水死体？どこの間抜けだ。この辺りを流れる川は緩やかだ。水深だって浅い。

俺は野次馬根性丸出しで水死体が引き上げられたという場所へ向かった。

「すごい可哀相なの」

現場に着いた俺をフィーネが出迎えた。フィーネは同情するような顔だった。

フィーネが水死体の第一発見者だったのだ。しかも、フィーネは死体がまさに川を流れているとところでくわしたのだ

という。

カワイソウ？土左衛門に可哀相もクソもあるのか、と俺は疑問に思った。

「だって、川を流れながら、何度も大きい岩にぶつかっていたんだもの」

フィーネは俺の疑問に答えた。

流れにそって流れる水死体がそんなに岩に激突するなんてことあるのか。

俺にはある予感があった。

というかランプレヒトと再会した時からある種、予感があったんだよな。

水死体は先ほど引き上げられ、今は川岸に横たわっている。

美しい男だった。肌は白く（いや、この状況なら誰でも白くなるか）髪は漆黒だ。

水死体がぴくりと震えた。

水死体は水死体ではなかった。

まだ息があったのだ。

そいつはようやく目を開け、俺を認め

ると、

「やあ」

といった。

川から流れてきたのはイレミアスだった。

イレミアスは俺に気づいた後、再び意識を失った。

イレミアスは一命を取り留めていたとはいえ、危篤状態であることに変わりはないかった。

俺は村の今は使われていない納屋にイレミアスを運ぶと、再び町へ向かった。勇者ならば常人が半日かかるところも三十分で行ける。

町へ行った目的はランプレヒトだ。俺はランプレヒトを連れて、村へ戻った。

回復魔法がほとんど使えない俺とは違って、ランプレヒトは回復魔法に長けている。イレミアス自身も回復魔法は使え

たが、意識のない今は無理だ。

ランプレヒトの回復魔法もあって、イレミアスは一命を取り留めた。

意識を取り戻したイレミアスは、ベッドかわりに敷き詰めた藁から起き上がった。

俺とランプレヒトの顔をしばらく見つめてからいった。

「ありがとう」

俺たちは黙ってうなずいた。

「……………それで、誰だっけ？」

一瞬、絶句した俺たちだが、その後、イレミアスは冗談だよと悪戯っぽく笑った。ええい、おまえがというと洒落にならん。

「それにしても、君たちは結局、つるんでいるのかい。さすが、友達にしたいくない部門の一位と二位だね」

ほっとけ。

俺はイレミアスにこれまでのことを手

短に説明した。

イレミアス自身は俺たちと別れた後は、文字通りのその日暮らしの風来坊だったらしい。

腹が減れば、動物を狩るか、木の実を食べる。

眠くなれば、そこらの草原にそのまま眠り込む、といった有様だったらしい。

それ風来坊というか野生動物じゃねえか。いや、野生動物でもそこまで天衣無縫に生きてはいないか。

何で溺れたのかは記憶にないということだ。イレミアスの病気はそれほど進行してもいなかったが、回復もしていなかったのだ。ただ、不運が訪れる回数は格段に減ったらしい。今回、溺れたことも含めて、この一年で死にかけたことは十回しかないそう。

十回！それは少ない！

一瞬、感心しかけた俺だが、これは俺

の感覚がおかしくなってるんだよな。

「そうだ、首飾り！首飾り、返せよ！」
ひと段落した途端、ランプレヒトがわめき出した。

「首飾り？ああ、あれか。返せつてな何だよ。ありや毛皮の正当な代価だろう。それをまるで人が強引に奪ったみたいに」
「取ったんだろうが！」

ランプレヒトは憤慨していった。
何でもランプレヒトの話では、俺があ
の首飾りを持ってた後、入れ違いでやっ
て来た客があ
の首飾りを欲しがったんだ
そう
な。その客はどうしても、首飾りが
欲しかったらしい。ランプレヒトの店に
来たのも偶然ではない。販売ルートを追
って、あの店に入荷するのを知ってやっ
てきたというのだ。

「そんなお値打ちものだったのかよ」
「そうだよ、だから返してくれよ。金

貨二十枚出す」

ほう気前いいな。この野郎、向こうからは金貨五十枚とか提示されたんだろ。いや、こいつのこすずるさから考えると百枚の可能性もあるな。

「五十枚！それなら考える」

俺はいった。

「なあ……ファイネ！」

俺は向こうを通りがかったファイネに同意を求めた。無論、俺たちの会話なんか聞こえてやしない。急に同意を求められ、ファイネはわけもわからずうなずいた。

「そりゃねえだろ」

ランププレヒトは渋っていたが、結局同意した。今回の売買で儲けがほとんどなくとも、太客とのコネができるのは魅力的だったんだろう。

だが、結局ランププレヒトにその場で首飾りを返すのは断念せざるを得なかった。

フィーネが首飾りを離さなかったのだ。しまいには泣き出すフィーネに、俺もランプレヒトも困り果てた。

取りあえず後々、時間をかけて説得するでしょう。何か、他のアクセサリーを代わりに渡してもいい。

ランプレヒトは盛大なため息をついて、町へ帰っていった。